
冬の向日葵

桜桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬の向日葵

【Nコード】

N0689Y

【作者名】

桜桃

【あらすじ】

「わかってほしいのは貴方だけ。
隣に居てほしいのも貴方だけ。」

願い事は1つ。

彼の傍に居たい。

Sun Flower · part 1

「なあ、灰原。」

「何よ。」

「え、いや・・・起ってるのか?」

朝、学校に来たコナンは隣の哀に話しかける。

「別に。どうして?」

「いや、にらんでるように見えるからよ・・・」

「もともとこついう顔なのよ。」

「気を悪くしたなら・・・ごめんなさい?」

「ちょっと荒い口調で言った。」

「べ、別にそついうわけじゃ・・・」

「もっと怒らせたかと焦るコナン。」

「私なんかにかまってないで、彼女を元氣付ける方法Yを
考えれば？」

「最近また、泣かせてるそうじゃない？」

「そ、そうだな・・・」

「電話をしてみるとか、いろいろあるでしょ？」

乱暴に教科書を置いていく。

「哀ちゃん、どうしたの？」

「あ・・・別に、なんでもないわよ。」

「すっげー変わりよう・・・」

「何か言ったかしら？」

「何も言ってますん。」

「そう。」

「コナン君と哀ちゃん、何はなしてたの？」

「他愛のない話しよ。」

「ふうん。」

歩美は人差し指を顎にあてて、
？マークを浮かべた。

Sun Flower・part1 (後書き)

やあっと書ける日がきました！

mineさんからのリクエスト小説です。

蘭と哀の恋のバトル！！

どうなるのでしょうか？

これからも宜しくお願いします

Sun Flower · part 2

「「お・ん・せん！お・ん・せん！」」

歩美、元太、光彦の3人は嬉しそうにはしゃいでいた。

ここは阿笠邸の前。

「それにしても・・・博士と灰原さん、遅いですね・・・。」

「ちよつと待つててつて、15分前に言ったきりだよね。」

「腹でも壊してんじゃねーの？」

「・・・元太君じゃないんですから・・・。」

「ま、取り合えず寒いから博士ん家で待つてよーぜ。」

「賛成！！」

「はーかせぐまだあ？」

「まちくだびれてしまいましたよ。」

「俺なんか腹減っちゃまったぜ」

「なにやってんだよ。」

「すまんすまん。昨日のうちに準備してなくてな・・・」

「だから言ったじゃない。」

「もう準備したの？って。ったく・・・。」

「ははは・・・」

もう苦笑いするしかない。

「仕方ねえ・・・俺達も手伝うぜ。」

「そうですね！」

「皆でやったらすぐ終わるもん！」

「よし、やるぞー！...！」

「」「」「おー！」「」「」

何に対してもハイテンションな3人に

小さく笑う。

「そついえば・・・彼女に電話してあげたの？」

「え？あ、ああ・・・まあな。」

ズキンッ

「そう……」

「……？何か、怒ってねえか？」

「気のせいよ。」

「？」

「ほら、さっさとこれを運んでくれる？」

「じゃないと日が暮れるわよ。」

そう言い放つと哀はスタスタと歩き出した。

「……なんだあ？」

コナンの頭の中は？マークでいっぱいだった。

「やっと出発だね！」

「楽しみです！」

「たっくさんお土産買ってかなきゃな！！！」

「食べ過ぎるなよ、元太。」

「わ、わかってる……」

「……どっかの誰かさんも、あんまりのろけないでよね。」

「はあ？それって、俺のことかよ。」

「さあね。」

哀は静かに窓の外を眺めた。

Sun Flower · part 2 (後書き)

文化の日・・・は

部活の打ち上げ会です

部活が終わってそのままドンキへ直行なのですが・・・。

声がない・・・！

明日は部活、見学だわ・・・。

Sun Flower · part 3

「やあっといけるね 温泉。」

「ほんとですね。」

「つたく博士、準備にどんだけかかってんだよ。」

「まあ、今度からは灰原の言うとおり
前の日から準備しとくんだな、博士。」

少年探偵団の言葉に博士は苦笑い。

「ふああ・・・ほんとならもっと寝ときたいのに
博士にたたき起こされた私の身にもなってほしいものね。」

「すまんのお、哀君。」

「私、寝てるから着いたら起こして。」

助手席に座る哀が冷たく言い放つ。

「おい、博士。」

灰原、いつもに増して機嫌悪くねえか？」

「わしが起こしてしまったからだろう？」

「いや、最近ずっとなんだよなー・・・」

「ちょっと、聞こえてるわよ。」

「え。。。」

哀はジロリとコナンを睨んだ。

「私の機嫌が悪かろうとそうでなかつたら
貴方には関係のないことでしょ？」

「あ、ああ・・・そうだな。」

コナンと博士は目を点にするしかなかった。

キキッ

「わぁ……温泉、だね！」

「ええ……温泉、ですね！」

「お……温泉、だな！」

瞳を輝かせる。

「おい、灰原。着いたぞ。」

「ん・・・そう。」

カチャッ

「綺麗な旅館ですね。」

「温泉にはいるの、楽しみ〜!」

「俺たちの部屋、どこだよ!」

「これこれ・・・」

「おい、走るなって。・・・女王様が怒るぞ。」

後ろで腕を組み、睨む哀の姿を見てコナンはつぶやいた。

「女王様って、私のことかしら。」

「他に誰がいるっていうんだよ。」

「じゃあ・・・女王様の荷物、持ってくれない？」

「俺が？」

「他に誰がいるっていつのよ。」

哀はコナンに荷物を差し出す。

「はぁ・・・」

「落とさないでよね。」

「女王様の大切な荷物なんだから。」

「へいへい。」

「あれーコナンくん、何で哀ちゃんの荷物持ってるの？」

「お願いだからそこに触れないでくれ。」

「？」

「こちらがお部屋でございます。」

「このお部屋、ヒイラギって言うんだ。」

「まさに今の時期にぴったりね。」

「このお部屋は柊の花がよく見えるんですよ。
今は冬ですから。」

にこりと笑って説明してくれた。

「こっちは紅葉だってよ！」

「こっちは桜です！」

あっちこっちに転々として元太と光彦は叫んだ。

「そこのお部屋は秋になると紅葉が綺麗に見えるんです。そして、そこのお部屋は春になると桜が満開に咲くんですよ。」

「へえ……それぞれ見える花の名前を部屋に割り振ってるわけね。」

「なんだかロマンティック。」

「……重い。」

「あなたね、感動しているそばからそんなこと言わないでくれる？
崩れるわ。」

「あのなあ、おもてーんだよこれ！」

「あら、私女王様なんでしょ？
女王様にそんな重たいものを持たせる気？」

「……お前、女王様って言ったの、気にしてるのか？」

「別に。」

「コナンは目が点になり、哀は睨んでいる。」

「ちあ、じいじ。」

中へ入っていった。

Sun Flower . part 3 (後書き)

遅くなつてすみません!!

次回もまた、宜しくお願いします!!

Sun Flower · part 4

「わぁ、ひろーい!!」

「部屋がたくさんあります!」

「おい、こっち来いよ!!風呂場も広いぜ!」

「わぁ、早くお風呂入れようよ!入りたい!」

「おいおい・・・風呂はそこじゃなくて・・・」

「あ、そっか!」

「「「大浴場!」」」

3人はおおはしやぎ。

「どうする？博士。」

先に風呂に入るか？」

「わしはどつちでもかまわんが……」

「ねえ、先に入っちゃおうよ！」

「そうですね。」

「俺もう入る気満々だぜ！」

「んじゃあ、今から一時間後にココに戻ってきて夕飯にしようぜ。」

「行く、哀ちゃん。」

「悪いけど、私はパス。」

「おいおい……お前ココにきてまで雰囲気ぶち壊すなよな。」

「うるさいわね、疲れてるのよ。」

お風呂なら私が好きなときに入るから。

吉田さん、ごめんなさいね。」

「あ……ううん。気にしないで。」

じゃ、元太君、光彦君、行くっ？」

「おお」

「はい！」

3人で仲良く歩くところを見送る。

「・・・灰原、オメー何怒ってんだよ。」

「別に。」

「うそつけ。顔が怒ってるのバレバレ。」

「私はもともとこっぴどい顔なのよ。」

「大体、風呂くらい一緒に入ってやれよな・・・
歩美ちゃん、完全に作り笑いしてたぞ。
お前にだってわかってたんだろ？」

「・・・」

「何で怒ってんのかしらねえけど
夕飯はちゃんとカルシウムとっておけよ？」

コナンはそっぴい残すと部屋をあとにした。

「はぁ・・・つたく、本当に女心をわかってないのね。
あれでちゃんと探偵が務まってるのが怖いわ。」

哀は柊の花を見つめながらそっぴいぶやいた。

Sun Flower . part 4 (後書き)

次回もよろしくです!!

Sun Flower · part 5

「はー、気持ちよかった

あれー、哀ちゃん何読んでるの?」

「え?ああ・・・科学者の苦悩。っていう

ゾクゾクしちゃうような話よ。」

「へえ。」

終わったら歩美にも見せて!」

「いいけど・・・死体とか殺しとか・・・

あるし、漢字も沢山あるから読めないわよ?」

「そうなんだ・・・歩美には無理そうだね。」

そう言って笑顔を向ける。

「吉田さん、一緒に入らなくて・・・
怒ってる?」

「え?なんで?」

「そりゃ、ちよつと悲しかったけど・・・」

「でも、哀ちゃんが入りたくないって言うてるんだもん
無理には誘えないでしょ?」

「吉田さん・・・」

「あ、ねえ!哀ちゃん、柊の花が月の光で輝いてる!
宝石みたい。綺麗だね!」

「ええ・・・」

「へえ、ここ、柊だけじゃなく
月も綺麗に見えるんだな。」

「わっコナン君!ビックリした・・・」

「貴方ね・・・人間なら人間らしく物音くらい立てなさいよ。
ビックリするじゃない・・・」

「わりーわりー。」

悪そうに詫びないコナンに哀はため息を漏らした。

「そろそろ夕飯の準備しに来るんじゃない？」

「え？ここってバイキングとかじゃないの？」

「ああ・・・ここは旅館だからこの人が持ってきてきてくれんだよ。指定の時間にな。」

「へえ。」

「はいはい・・・探偵さんは何でも知ってていいわね？」

「あのなあ・・・嫌味にしか聞こえねえんだけど。」

「別に。」

「まあ・・・ちなみのその引き戸をひいてみると・・・」

「わあ・・・!!」

「綺麗な天女の絵が飾られてるんだぜ。」

それさ、ジグソーパズルで、この女将さんの趣味らしいんだ。あまりにも作りすぎたらしくて一部屋一部屋に飾ってるんだぜ。

確か・・・サクラの部屋は女神。スミレの部屋は天使。

ヒマワリの部屋はうさぎ。コスモスの部屋は妖精。

つと・・・こんな具合にさ。」

「・・・かなり詳しいのね。」

「ああ・・・前にここで殺人事件があつて・・・」

「殺人事件つて・・・」

「大丈夫、現場はもう使われてないからよ!」

「そういう意味じゃないわよ・・・つたく。
それより、小嶋君たちは?」

「ああ・・・まだ入ってるぜ。
遅いから先にあがってきたんだ。」

「ふーん。」

ダダダダダダダッ

バンッ

「元太、少し静かに・・・って光彦かよ。」

「た、大変です！」

光彦の後ろから元太が息を切らしてやってくる。

「た、大変だ！」

「どうしたの？」

「殺人事件か！？」

「・・・なんで嬉しそうなのよ。」

「人が殺されることがそんなに嬉しいの？」

「そうじゃなくて・・・」

「最近事件がご無沙汰だったから・・・
謎解きしてーな、って思ってた・・・」

「だったら、なぜなぜでも解いてなさいよ。」

「あれは簡単すぎるんだよ！」

「だったら難しいのやればいいでしょ？」

「そーじゃなくて！」

「どうでもいいんですよ、そんなのー！」

と、とりあえず・・・僕についてきてくださいー！」

「？」

とりあえず、光彦についていくことになった。

Sun Flower · part 5 (後書き)

さて・・・

殺人事件、なのでしょうか？

それとも・・・。

「おい、光彦。」

「一体何があつたんだよ。」

「あの人、見てください!!」

指をさす方向を見る。

腰まであるだろう長い黒髪はゆるくカールされている。

真っ白な肌にうつすらと頬はピンク。

薄い唇。

世間では一般的に「美人」の分類に入る

1人の女が周りにちやほやされながら笑っている。

「あの人がどうかしたか？」

「なんか、女将さんとか手懐けてるけど・・・
どっかの令嬢なのかしら？」

「いえ、違いますよ！」

「じゃあ、誰なの？あの人。」

「新一さんの恋人らしいんですよ！」

「はあ!？」
「

コナンと哀は同時に声を出す。

「ちよつと、工藤君。

貴方いつの間にあんな人に出会ったのよ。」

「しらねえよ。」

第一、名前も知らないんだからよ!」

「だったら何で名乗ってるのよ。彼女だって。」

「だーから、しらねえよ!

大体、新一なんて珍しい名前じゃねえだろ。」

「あのー、コナン君、灰原さん・・・
僕の話し、聞いてますか？」

「あ、わり・・・」

「で・・・彼女は高校生探偵の工藤新一の彼女だって
言ってるの？」

「はい。何でも新一さんがここで起きた殺人事件を解決したらしく
て・・・

「この旅館の人結構新一さんに恩を感じてるそうなんですよ。」

「だから、彼の恋人だというだけであんなにちやほやとされてるの
ね。」

「はい。」

「でもさー、新一お兄さんの恋人って蘭お姉さんでしょ？」

「二股なんじゃねえか？」

「ひどいですね、それは。」

「男の風上にもおけません！女性の敵です！！」

「おいおい・・・」

「まあまあ・・・私の見たところ。」

「彼女は偽者ね。」

「え？偽者？」

目を丸くする歩美。

「ええ。

でしょ？『江戸川君』？」

「……。ああ、新一兄ちゃんは二股するような男じゃないよ。
それに……」

「それに？」

「ら、蘭姉ちゃんのこと以外はが、眼中にないと……
思う……」

ズキンッ

真っ赤になりながら答えたコナンの姿と

言葉に哀はとまどいを隠せないでいた。

「そっかー、そうだよねえ。」

「じゃあ、何であの人・・・そんなうそついてるんでしょっつ・・・」

「金でも貰うつていう魂胆じゃねえか？」

「そうでしょうか・・・」

「ま、嘘なんてすぐバレるものよ。

本人がそれで気がすむのならいいじゃない。

ほっときなさいよ。」

「だけど・・・」

「ま、ここは灰原の言うとおりほっとけ。

そのうち本人も飽きるだろ。」

納得できない様子の3人を置いて再び歩き出す2人。

「そういえば、博士どうした？」

「ああ、博士ならまだ入ってますよ。」

「はあ？いい加減のぼせるぞ？」

「っていうか、夕飯に間に合わないわよ。」

「だ、だよな・・・」

「僕、呼んで来ます。先に戻っててください。」

「あー、じゃあ、よろしくな、光彦。」

「はい。」

Sun Flower · part 6 (後書き)

まさかの偽者？

いやあ、これ・・・

ある少女漫画にあったんですよね。

偽者を偽った美しい女性が居て・・・

でも本物はただの子供みたいに対して美しくもない女の子。

その子は自分が本物だっけ言うんですけど信じてもらえないんですよ。

そこで考えたのが・・・

『新一の彼女だって嘘つくやつがいたら・・・？』

でした。

これにどう対処するのも自分としては楽しみで書きたかったんですよ。

3年越しの夢でした・・・。

Sun Flower . part 7

「ふあああ、良く寝たあ。

おはよ、コナンくん。」

「おはよ……」

あ、灰原どこ行ってたんだよ。

こんな早くに……まだ7時前だぞ?」

「別に……」

ただ頭を冷やしてただけ。」

「ふーん……」

「それより、ほんとにいいの?」

「え?」

「昨日の、工藤君の彼女気取りの子。」

「ああ……いいたい奴には言わせとけばいいって
昨日も言っただろ?」

「どつちやら、そういう状態じゃなさそうよ。」

「はあ?」

哀の言葉に「ナンは怪訝そうに聞く。

「結構調子に乗ってるみたい。」

「いいんじゃないの?」

「それで気分が良くなるんだったら。」

「・・・お金、取ってるのよ?」

「は?」

「ここで事件を解決して、

あなた、少しでも報酬を貰った?」

「いや・・・まだ高校生だし・・・

いくら事件を解決したとしても、貰ってねえよ。
全部断った。」

「でしょうね・・・」

「だから、その彼女が・・・そのときの報酬を貰ってるのよ。」

「貰ってる？」

「ええ。」

もう女王様気取りだったらなんの・・・
廊下ですれ違ったときなんか、頭を下げなかったって
突き飛ばされたのよ。

「たく・・・何様って感じよね。」

「突き飛ばすって・・・」

「一歩間違えたら暴行罪よ、あの人。」

静かに怒りをぶつけていく。

「で？いいの？」

あのままだと貴方の評判・・・
ガタ落ちよ。

さつきだって従業員の人が呟いてたわよ。
あんな女を彼女にしている工藤新一の
気心が知れない・・・ってね。」

「はは・・・」

「笑ってる場合じゃないわよ。」

大体、彼女だと偽ってお金を貰うなんて・・・
貴方の一番大嫌いな・・・犯罪なんじゃないの？」

意味ありげな表情で哀はコナンを見た。

「行くか……」

「どこに行くの？」

「え？いや……」

「昨日の、工藤君の彼女だと偽ってた人に

一言……言ってくるのよ。」

「そうなんですか!？」

「俺たちもいくぜ!!」

「おいおい……灰原、おめーが余計なこと言うから……」

「あら、1人より大勢のほうが心強いでしょ？」

「……はあ。」

「ちょっと、このコップ割れてたんだけど！」

「す、すみません！」

「まったく、謝罪だけじゃたりないわよ。

そうねえ……一万、で許してあげる。」

「そんな……！お金とるんですか？」

工藤探偵の報酬と、ここの宿泊代タダっただけで
うちは潰れてしまいます。」

「ごちゃごちゃ　うるさいのよ！クソババア！

あんたは言うこと聞いてればいいのよ。

あたしは工藤新一の彼女よ！？」

そんなあたしに逆らっていいと思ってるの!？
恩を仇で返さないでよ!」

「す、すみません・・・」

「ずいぶん言いたい放題ね。

しかも、かなり荒い性格・・・」

「あの人、報酬貰ってたんだ・・・」

「コップが割れてるだけで一万だってよ!

高けくよなあ。」

「それに、宿泊代をタダで要求してるみたいですし・・・
許せませんね。」

「おねーさん。」

「なに?」

話しかけてきた歩美にすごい形相で睨みつける。

「なんか用？」

工藤くんなら居ないわよ。

彼は今、事件でいないの。」

「あら、ちゃんと調べてるみたいね。」

「おいおい……。」

「それで？何の用なのよ。」

「ちょっと聞きたいことがあっただけなのよ。

貴方と工藤新一の出会い……とか。

あの有名な高校生探偵との出会いを聞きたくて。」

「あら……。」

なんだそんなこと。

別にいいわよ。そんなことなら。」

以外にあっさりと承諾してきた。

そして、すぐ近くの休憩所に腰を下ろす。

「体のライン・・・蘭さんといい戦いね。」

「どこ見てんだよ、おめーは・・・」

「それで・・・どこから話しましょうか？」

「そうね。彼とどこで出会ったかからでお願いするわ。」

哀は楽しそうに微笑みかけた。

Sun Flower · part 7 (後書き)

偽彼女・・・

果たして彼女は何者！？

Sun Flower · part 8

「そうね・・・彼とは高校が同じなのよ。」

「へえ・・・」

「最初は私の片思い。」

でも、図書室で何回か会うようになってね・・・

ある日、突然キスされたの。

それからよ、私たちの付き合いは・・・」

「付き合って何年目なのかしら？」

「高1のときからだから・・・1年くらいかしら。」

「って言うてるけど・・・知り合い？」

「しらねえよ。」

多分、学校自体違つと思う。」

「ふうん・・・」

「貴方の名前は？」

「新垣^{にいしがき}亜理紗^{あじひ}よ。」

「亜理紗……」

「ねえ、知ってる？」

「だから、しらねえって言ってるだろ？」

「そう。」

「で？後は何を聞きたいの？」

「彼の両親とは仲がいいの？」

「両親？ええ。仲いいわよ。」

「彼より私を気に入ってくれるくらいにね。」

「ずいぶん、下調べされてるみたいね。」

「彼より気に入られてるですって。」

「はは……」

「彼は今もサッカーを続けてるのかしら？」

「ええ。部活と勉強と探偵・・・」

「両立が大変だっていつつも言ってたわよ。」

得意げに話す亜理紗に哀はクスツと笑みを浮かべる。

「何がおかしいの？」

「別に・・・」

「ただ、そこまで嘘を突き通せるなんて・・・
すごいと関心してただけよ。」

「嘘ってね・・・」

亜理紗がグツと拳に力を入れたとき

「あれ？」ナンくん・・・」

突然声が聞こえてきた。

「ら、蘭姉ちゃん！どうしてここに？」

「・・・あ、眼鏡のガキンチョ！なんで居るのよ！！！」

「ちょっと、園子・・・」

「そんな言い方はないでしょ？」

「だって、この子がいるといっつも事件に遭遇するんだもん！」

（悪かったな・・・）

「蘭お姉さん！」

「事件ならおきましたよ！すでに・・・」

「事件？」

「ああ！とんでもない大事件だ！！」

「何があったの？」

「あの人、新一お兄さんの彼女さんだって言ってるの！」

蘭と園子の視線は歩美の指差す方向へと変わる。

「誰？あの人・・・」

「新垣亜理紗・・・帝丹高校2年生・・・らしいわ。」

「蘭さん、園子さん、あの人を知ってますか！？」

「
「
・
・
・
知らない。
「
「

「驚いてるみたいだけど……この2人。
帝丹高校の生徒なのよ。」

しかも……工藤新一の知り合い。」

「え!?!」

「とくにこの黒髪の蘭お姉さんは新一お兄さんの恋人なんだから!」

「なんで恋人だと偽っていたか知りませんが……
貴方がやっていることは犯罪です!」

「俺たち少年探偵団に嘘つこうなんて
げんごどうなんだ!」

「……元太くん、それを言うなら『げんごどうだん』です。」

「あれ? そうだっけ……」

「ちなみに、工藤君はもう部活やってないわよ。」

ねえ？蘭さん・・・」

「え？」

う、うん・・・新一は、サッカーは探偵をやるための体力づくり・・・
って言って2年のときにはもうやめたの。」

「彼女は工藤君と幼馴染・・・
貴方が偽恋人だと言うことはもうわかってるのよ。」

クツと口惜しそうに唇をかみ締める亜理紗。

「ね、ねえ・・・コナン君。

話が見えないんだけど・・・どういうこと？」

「ああ・・・あの、新一兄ちゃんの恋人だって偽ってたんだ。
新一兄ちゃんこの旅館で起きた殺人事件を解決したことを
蘭姉ちゃん、知ってるよね？」

「うん。」

「そのことのお礼をあの人がふんだくって
しかも宿泊代もタダにしてもらっていたみたいなんだ。」

「なにそれー、許せない！」

声を出したのは園子だった。

「新一君の恋人は蘭なのよ！」

「だ、だから・・・私と新一は何も・・・」

「何言ってるのよ、あんた新一君に告白されたじゃない！」

ズキンッ

哀の心に何かが突き刺さる。

「新一君は蘭以外興味ないこと・・・」

帝丹高校教員合わせて賭けてもいいわよ！」

「園子！」

「・・・いい？」

貴方のやっていたことは犯罪なのよ。
謝って許される問題じゃないわ。」

「そつだよ!」

「そつだ!」

「罪はちゃんと償わなければなりません!」

「・・・」

しばらく、亜理紗はその場で黙っていた。

Sun Flower · part 8 (後書き)

まさかの蘭、園子登場！

旅行だったのかな？

おいおい・・・

Sun Flower · part 9

「それより、何で蘭姉ちゃんたちがココにいるの？」

「前、言ってたじゃない。」

「学力テストが終わったら園子と温泉に行ってくる。って。」

（そっぴゃ、そんなこと言ってたな・・・）

「へえ。」

「コナン君たちはいつ帰るの？」

「今日だよ。」

「じゃあ、私たちと一緒にだね。」

「ねえ、園子。」

「え？あ、うん……」

「どうかした？」

「運転手に迎えよこしてただけ……
急にいけなくなっちゃったらしいのよ。」

「ええ？」

「じゃあ、バスで帰る？」

「ここ、結構山奥だからバスなんてそうそう通らないよ？
さっき、元太たちと山を歩いてバス停見たけど……
あと5時間はバス来ないし……」

「うそ、マジで？」

「信じらんない。」と園子はもらす。

「博士の車に乗ればいいんじゃない？」

「そうしろよ！」

「おいおい、人数オーバーじゃよ。」

「大丈夫！」

歩美はにっこりと笑った。

「大丈夫って・・・これかよ。」

運転席には博士。

助手席には哀と歩美。

そして左から蘭、園子、元太・・・

コナンと光彦は蘭と園子のひざの上이었다。

「うん。」

だって、コナン君と光彦君は軽いからのって平気でしょ？
元太君がおひざのったら骨が折れちゃうもん。」

「・・・」

「しかし、こんなところを警察に見られたら
つかまってしまっぞ・・・」

「大丈夫よ。」

例の通り魔でこっち方面に警察はあまり居ないから。」

哀は静かに言い放つ。

「あ、哀ちゃん・・・何か怒ってる？」

「別に。」

「おい、灰原。」

気分が悪いんだったら窓開けたほうが・・・」

「何でもないって言ってるでしょ？」

「そ、そうか・・・？」

「哀ちゃん、いい・・・。」

「わあ、海だあ！！」

「綺麗ですね。」

「青だぜ、青！！」

窓にへばりつくように覗き込んだ。

「博士、海に行きたい、海！！」

「海ってな・・・今何月だと思ってんだよ。
風邪引くぞ？」

「だってー。」

「あら、いいんじゃないの？
眺めるくらい。別に泳ぐわけじゃないんだから。」

哀の言葉に目を輝かせる3人。

海の寄ることになった。

Sun Flower · part 9 (後書き)

さてさて・・・

次回も宜しくお願いします！ (結局これ・・・)

「わあ、さむーい！」

「でも、気持ちいいですねえ。」

「疲れなんか吹き飛ばさうぜー！」

「・・・元太君の疲れってなんですか・・・？」

「逆にこっちが疲れちゃってるよね。」

「う、うるせー！」

「子供は元気でいいね？」

「あら、貴方だって今や子供なのよ？」

「んなこと言ったらオメーだってそうだろ。」

「そうね・・・でも私はそういうの遠慮しとくから。」

しらつと言いのける。

「そついや・・・あの新垣亜理紗つてやつ・・・
結局どうしたんだらうな？」

「さあ？」

蘭さんは警察沙汰にはしないほうが良いって
言うもんだから何もしてないけど。」

「だよな・・・」

「宿泊代タダつていうのも帳消し。
報酬も返したらしいから一先ず一件落着。よね？」

「だと・・・思う。」

「何よ、ハッキリしないわね。」

「いや・・・
なんかいやな予感がすんだよな・・・」

「・・・貴方の勘つて意外と当たるから嫌なのよね。」

「嫌つてなんだよ・・・
当たらないより、当たるほうがいいだろ。」

「そうだけど・・・」

そんな不吉な勘なら当たらないほうがいいに決まってるでしょ?」

「ま、とにかく俺あいつら心配だからついてる。

お前は・・・蘭たちのところに居てくれ。」

ズキッ

「・・・なによ、人の気も知らないで・・・」

「キヤー！」

「何するんですか!?!」

「歩美を離せ！」

「おい、どうした!?!?」

歩美を抱きかかえていたのはあの、新垣亜理紗。

「こっちは崖のようなところ。」

亜理紗は、今にも歩美を落とすつもりらしい。

「あんた達があんなことしなけりや」

「大体はあんたの所為だろ!?!」

「うるさい」

「歩美!」

「歩美ちゃん！」

スローモーションのように歩美は突き飛ばされる。

コナンはとっさに歩美の腕を強く引っ張った。

その反動で今度はコナン自らが犠牲となった。

ドサッ

「大丈夫ですか！？歩美ちゃん！！」

「歩美は大丈夫・・・でも、コナンくんが・・・！！」

ザバーンッ

「コナンくん……！」

Sun Flower · part 10 (後書き)

さて・・・

海に落ちてしまったコナン。

風邪引いてしまいますね・・・。

そういう問題じゃない気が・・・

「どづしたの!?!」

歩美の声を聞いた4人が駆けつけてくる。

「こ、このお姉さんが・・・」

「歩美ちゃんを突き落とそうとして・・・」

「そしたら、コナンが・・・コナンが・・・!」

「え?」

「コナンくんが、歩美の変わりに落ちちゃったー!」

哀はただ、驚くばかりだった。

「・・・園子、その亜理紗さんって人・・・
捕まえておいて。」

「うん。」

「蘭はどうするの?」

蘭はコートを脱ぎ捨てる。

「まさか・・・」

「大丈夫、安心して。」

「コナン君は絶対助けるからっ」

「蘭!らん!」

蘭は高い崖から飛び降りた。

「蘭お姉さん…！」

「…！とにかく、下におりるんじや…！」

「……新垣亜理紗さん。」

「貴方、場合によっては殺人罪よ。」

「うっ……うっ」

「……何泣いてるのよ。」

「貴方が泣く場合じゃないでしょ？」

「あ、哀ちゃん……」

「これで江戸川君はおるか、蘭さんまで死んでしまったらどうするのよ。」

「貴方、責任取れるの？」

「ごめ……ごめんなさい……」

「謝ってすむ問題じゃないのよ。」

「良くても殺人未遂よ、貴方。」

「……博士、今から警察を呼んでちょうだい。」

「え？し、しかし……」

「彼女に情けは無用よ。」

「あ、哀ちゃん少し、言いすぎ……」

「言いすぎ？」

これで2人が死んだら言い過ぎも何もないでしょ？」

今の哀に勝てるものなど誰一人居ない。

「あ、蘭お姉さんだ！！」

「らあん！！」

「園子……心配かけてゴメンね。」

ずぶぬれの蘭に園子はコートを被せる。

「コナンくんは……？」

「大丈夫だと……思っただけど。」

「……大丈夫なんかじゃないわよ。」

「え？」

「かなり水を飲んでるみたい。」

息もしていないし……そのままじゃ、やばいわよ。」

「え!?!?」

蘭はすぐさまコナンを寝そべらせた。

「コナン君!?!コナン君!?!」

「……人工呼吸。これしかないわよ。」

「うん!?!」

「コナン君……」

「博士、何やってるのよ!?!救急車呼んで!?!」

「コナン……」

「コナン君……」

（大丈夫だよ、コナン君……！）

歩美はただ、お守りを握り締めることしか出来なかった。

Sun Flower · part 11 (後書き)

わんわん・・・

コナンの意識はいかに・・・!?

「応急処置をしたのが不幸中の幸いでしょう。
ですが・・・この気温で海に入ったことと水を大量に飲んだことが
最悪の事態でしたね。」

さきほどの医師の言葉が頭から離れない。

「あーいちゃん。」

昨日からなんにも食べてないでしょ？

いろいろ買ってきたけど・・・何食べる？」

「・・・」

「んつとねえ、サンドウィッチにおにぎり・・・

パン・・・どれがいい？」

「いない・・・」

「でも、何か食べないと。」

蘭の言葉が次々に降りかかってくる。

「江戸川君がこんな状況で
のんきに食べられないわ。」

「そんなこと言っても・・・

哀ちゃんが倒れちゃったら元子もないでしょ？」

「貴方になにがわかるのよ！！」

強い貴方に・・・私の気持ちなんてわからない！

わかった風な口を利かないで!」

ダッ

「あ、哀ちゃん!」

哀の走った先はコナンの病室。

「江戸川君・・・なんで、なんで貴方は・・・」

ジッ。ジッ。ジッ。

「どっして、目を覚まさないの？」

何時になく、哀は弱弱しくコナンに話しかけていた。

S u n F l o w e r . p a r t 1 2 (後 書 き)

普段じゃ絶対にありえない

哀ちゃんの弱さ・・・

Sun Flower · part 13

「蘭・・・コナン君、目覚めました？」

「ううん・・・まだ・・・」

「そっか・・・」

それより、蘭は大丈夫なの？

蘭だってあの寒さの中、海に飛び込んで・・・」

「大丈夫だよ、園子・・・」

コナン君のほづがもつと辛いに決まってるもん。」

そつと呟くように話す蘭に園子の顔は険しくなっていく。

「それより、新一君にはこのこと・・・報告したの？
確か、コナン君と遠い親戚だったよね。」

「うん。」

「一応、メールしたんだけど・・・留守電だった。」

「ったく・・・あの推理オタクは・・・」

「たしか、蘭が記憶喪失になったときも居なかったわね。」

「しょうがないよ、新一・・・忙しいもん。」

「はあ・・・あなた、本当にいい奥さんになるよ。」

「コンコン」

「はい……」

「はい・はい・はい・ちゃん」

「く、工藤君のお母さん……?」

どうしてここに。と言いたそうに哀は目を丸くさせる。

「阿笠博士から連絡があったのよ。」

優作はどうしても仕事に離せなくてこれなかったけどね……」

「そう……」

「新ちゃん、寝てるんだ……」

「水を大量に飲んだのが一番の原因らしいわ。」

「そっか。」

歩美ちゃんを庇ったんだってね。

この子らしいわ。

蘭ちゃんが飛び込んで助けに来てくれたんでしょ？

後でお礼言わなきゃね。」

「……わ」

「え？」

「あの人にお礼なんて……！」

工藤君がこんな辛いときに、あの人は平然としてた……

どうして、どうして笑顔で居られるの？

私にはわからないわ。」

哀は取り乱したように言つと

有希子は優しく微笑んだ。

「それが蘭ちゃんの優しさなのよ。」

「え……?」

「蘭ちゃん、平然として見せてたんだと思うわ。自分のせいで周りが暗くなったりするの……新ちゃんはいやだとわかってるから。」

「でも……」

「そこが、蘭ちゃんの強いところよね。」

「……」

有希子はそれだけを言い残すと病室を後にした。

そんなの、とっくにわかってる。

こんな状況で皆が暗くなってるところを

元気付けようと健気に頑張る彼女が羨ましくて仕方がなかった。

自分には出来ないことを、簡単にやって見せてしまう彼女が
たまらなく、羨ましかった。

そんなところを、彼が好きになったと知っていたからこそ・・・
尚更、羨ましかった。

周りをひきつけてしまう彼女・・・

彼を虜にさせてしまう彼女・・・

自分とは全く正反対な彼女・・・

『太陽』と『月』

『光』と『影』

『白』と『黒』

『イルカ』と『サメ』

皆が彼女を愛し・・・

彼が彼女を愛し・・・

私がどうしても手に入れたいものを

彼女は持っている。

彼の心・・・

彼の気持ち・・・

『そこが、蘭ちゃんの強いところよね。』

彼の両親までもが

彼女の人柄の良さを理解している。

なんで・・・

なんで・・・

私と彼女は正反対なのだろう。

窓に映る夕日を眺めながら

哀は思った。

Sun Flower · part 13 (後書き)

皆様・・・

風邪などは引いていないでしょうか？

どんどん冷え込んでいき

乾燥する冬です。

加湿器・・・または近くに洗濯物を干して
防止してくださいね。

コンコン

「入って・・・いいかな、哀ちゃん。」

「・・・どいぞ。」

蘭はちよつと、戸惑った様子で入ってくる。

「コナンくん、やっぱり・・・」

目覚まさないね。」

「ええ。」

「哀ちゃん、リンゴ買ってきたんだ・・・」

一緒に食べない？」

「え……？」

「ほんと、コナン君って罪作りだよね。」

「え？」

「恋愛には超鈍感そうだもん。」

蘭はリンゴの皮を剥きながら話す。

「ええ……そうね。」

「女の子の気持ち・・・きっと、疎くて直接言葉で伝えないと・・・
伝わらなさそうだよね。」

「ええ・・・」

「だから、哀ちゃんも伝えたほうがいいよ。」

イキナリの言葉に目を丸くさせた。

「コナン君のこと、好きなんですよ？」

「私か？」

「うん。」

「・・・貴方にまでわかるなんてね。」

「わかるよ。」

「だって、哀ちゃん可愛いから。」

「・・・バカにしないで。」

「バカになんてしてないよ。」

恋する女の子って皆可愛いと思うんだよね。

だって、きらきらしてて、その人を一途に思っ
て……輝いてて、一段と綺麗で可愛く見えるから。
あっ哀ちゃんは元々可愛いんだけどね。」

別に、まずいことを言ったわけじゃないのに

慌てて修正する蘭に哀は小さく笑った。

「あ、哀ちゃん？」

「あ……ごめん、なさい。」

ただ……可愛い人だなって思っただけよ。」

「か、可愛い！？

私が！？」

「……いまさら、何言ってるのよ。」

「全っ然可愛くないもん！」

「そんな全力で否定しなくてもいいじゃない……。」

「あ、あはは……そうだね。」

せっかく褒めてくれたんだもんね、お礼言わなきゃ……
あ……ありがとう。」

褒められてお礼なんて言いなれてないのか

きこちなくお礼を言う。

「でも……」

哀ちゃん、自分の気持ちを言っただ損はないと思うよ……」

「……」

穏やかに話す姿が姉と重なる。

哀もさっきまでの威圧感は嘘のように心が安心に満ちる。

しかし、そんな感情の揺れはすぐに崩れ落ちた。

「まあ、私の場合……自分からは言えなかったけどね。

全部、新一に言われちゃった……」

だから、哀ちゃんにこんなこと言えるような立場じゃないんだけ

ど……」

この言葉だ。

「……っで。」

「え？」

「帰って！」

リンゴなんて入らないから、帰って！」

「あ、哀ちゃん？」

「お願いだから、帰って！」

蘭に悪気がなかったのはわかってる。

ただ、自分より彼女を選んだ現実を叩きつけられて

急に、胸が苦しくなっただけ……

哀は蘭を追い出した後、その場に座り込んだ。

Sun Flower · part 14 (後書き)

ら、蘭を嫌いになんてならないでくださいよ！
皆さん！！

彼女はいつだって、Angelなんですから！！
(今回はそう見えないかもしれませんが・・・)
(

ピッ

ピッ

ピッ

ピッ

コナンが入院してかなりの年月が経ったような気がする。

5年も、6年も・・・

ずーっと、ずーっと長い年月・・・

過しているような気がする。

(バカね・・・姿は何も変わっちゃいないのに・・・。)

どうして

彼女にあんな言い方をしてしまったんだろう。

今更ながら、後悔した。

蘭と向き合おうと・・・

もう逃げないと決めたあの日から

ベルモットに撃たれそうになって

守ってくれた蘭。

姉と重なってならなかった。

何時だって自分は彼女の味方でいようと

ずっと思っていたのに・・・

私の中の『黒』がうごめく。

「私と彼女の決定的な違いは・・・
やっぱり、黒か白か・・・なのかもね。」

自分の中に黒があるかどうか・・・

それが違いだと自分で納得していた。

「いつそ・・・何もなかったかのように
生まれ変わりたいものよね・・・。」

ピッ

ピッ

ピッ

ピッ

「ねえ、工藤君・・・」

もし、私が宮野志保じゃなくただの灰原哀で
貴方が工藤新一ではなく江戸川コナンだったら・・・
こんなに苦しまなかったのかしら。

私は・・・素直に貴方が好きだと・・・
言えたと思う？

貴方がただの江戸川コナンだったら・・・

貴方は・・・貴方は・・・

私を好きになってくれた？」

Sun Flower・part15(後書き)

1話しか投稿できそうになかったので・・・

とりあえず、金曜日に予約しておきました。

土曜日、頑張りたいと思うのでよろしくです！

何度目かのお見舞い・・・

いつものように花瓶の水を取り替えた。

「ん
.
.
.
.
.
.
」

小さく・・・

空耳かと思うくらい薄っすらと聞こえたのは・・・声？

反射的に寝ているコナンに振り返った。

「く、工藤君……!？」

今度は目が開く。

どうしようもない、喜び。

彼が目を覚ましたら、蘭が最初に駆けつけるだろう。

彼の瞳を最初につつすのは彼女だろうと・・・

ずっと思っていたのに。

最初に彼の瞳につつるのは・・・

自分。

哀は花瓶を置いてコナンに駆け寄った。

「工藤君!!」

「えっと・・・誰ですか？」

「
で
す
か
っ
て
.
.
.
.
.
.
」

何を悪ふざけ言っているのだろう。

そう、彼はすぐに笑って

「冗談だよ、冗談！
ちよっとオメーをからかったただけだよ。」

そう言ってくれるに決まってる。

記憶喪失？

そんなわけない。

彼は、私に意地悪してるだけ。

Sun Flower . part 16 (後書き)

ま、まさかの・・・!?

「えつと・・・本当に誰？」

「貴方、自分の名前は？」

おそる、おそる聞いてみた。

名前まで忘れていたら、完璧・・・

記憶喪失。

「工藤新一」。

しかし、かえってきた言葉は想像してたのとは全く違う言葉だった。

「え？」

「俺は工藤新一！
他の誰でもねえだろ。」

そう喋った声は、彼であって彼ではない。

哀はそう認識する。

彼の大人びた声じゃない。

本当に、子供のような・・・

そんな、声。

「あ、まさかオメー・・・
蘭の友達か？」

ズキン

どうして彼は、自分じゃなく彼女を覚えているのだろうか。

「貴方、年はいくつ？」

「はあ？7歳に決まってるだろ。」

この言葉を聞いたときには倒れそうになった。

「それより、お前は？」

「私・・・？私は・・・灰原哀。」

「灰原？珍しい名前だな。」

「あいつてことは・・・愛するのあい？」

「違うわ・・・哀しいのあいよ。」

「かなしい？なんで・・・」

「私には、その名前がぴったりだから。」

「ふうん・・・なんか、オメー変なの。」

でも、不思議だな、全然違和感ねえの。」

ドクン

ぞうじて、彼はさらりと嬉しいことを言ってくれるのだろうか。

そう、そんな貴方だからこそ・・・私は惹かれた・・・

Sun Flower . part 17 (後書き)

まさかの・・・幼児化!?

いや、幼児化してるんだよね、うん・・・。

S u n F l o w e r . p a r t 1 8 (前 書 き)

哀ちゃん視点続きます。

名前を聞かれたとき・・・

宮野志保とこたえたほうがよかったのかしら。

そうしたら、真正面から向き合えた？

・・・いいえ、私はどんなことをしても逃げていた。

だったら、灰原哀としてだったら・・・

「工藤君、今の状況を教えるわね。」

「ああ。」

せめて・・・

せめて、彼が工藤新一としての記憶ではなく・・・

江戸川コナンとしての記憶でいたら・・・

工藤新一という過去を捨て去っていたら・・・

私はどんなに楽だったのだろう。

「あなたは、通り魔に銃で撃たれたの。」

「はあ!？」

「相手は全くの無差別だったから・・・だから、たまたま貴方が狙われてしまった。」

「どおりで痛いと思った。」

「だから、しばらく安静にして頂戴。看病は私と博士がするから。」

「ふーん、サンキューな。哀!」

「あ、あい・・・?」

「あれ?違ったか?灰原哀だよな。」

「ええ。」

哀と・・・呼び捨てにされたことは一度もない。

いつも灰原で・・・

『歩美ちゃん』よりは近くて『蘭』よりは遠い・・・

呼び名。

私は、満足していた。

この呼ばれ方に満足していたのに・・・

『哀』と呼ばれてしまったら・・・

それ以上を欲張ってしまうじゃない。

「・・・工藤君の、バカ。」

「へっ？ば、バカ・・・？」

「なんでもないわ。」

「なんだよ、ヘンなやつー。」

「・・・それと。」

貴方が入院している間、博士と私以外は近づかない。」

「はあ？何でだよー！」

「なんでもよ。」

「んじゃあ、当分友達には会えねえってことかよ!」

「そっよ。」

まあ、いつまでも子供じゃないんだから・・・

これくらいは我慢できるわよね?」

「う・・・で、できる。」

彼の本当の一年生が、見れたような気がする。

それが、私にとって嬉しい限りだった。

Sun Flower・part18(後書き)

しばらく、哀ちゃん視点にしていきたいと思います。

長い間、お待たせしました。

『なに！？新一が記憶喪失じゃと！？』

「正しくは、小2から今までの記憶が抜けてるのよ。」

『じゃが・・・なんで・・・』

「それで、博士にお願いなんだけど何とか理由つけて
皆を工藤君から遠ざけてくれないかしら。」

『あ、ああ・・・じゃが・・・』

「じゃ、切るわね。」

博士の声も聞かず、私は電話をきった。

ガラッ

「工藤君、今博士に電話しておいたから。」

「ああ、ありがとうな。」

「ええ……。」

「なあ、何でお前そんな哀しい目してんだいよ。」

「え？」

「哀しいっていう字が自分の名前だからか？」

心底心配そうに私に尋ねてきた。

「私、そんなに哀しい目をしてたかしら？」

「してる！」

「……私は、元々こういう人なのよ。」

「そうなのか？」

「ええ。」

「それにしてもさ、初対面なのに俺に看病してくれてサンキュー。」

「・・・工藤君、もう1つ付けたいとね・・・
あなたは撃たれた衝撃で一部記憶を失ってるのよ。」

「一部っていつか・・・」

「大分失ってるような気がするけど・・・」

「先ず彼を興奮させないように言い方を考える。」

「へえ。」

「……へえ、つて……驚かないの？」

「まあ、そんなことだろうなって思った。」

彼は昔から勘がよかったのかしら？

「で、どこからの記憶がねえんだよ。」

全部、言ってしまったほうがいいのかしら……。

そっちのほうが、私としては楽かもしれない……。

たまには、私も楽になっていいかしら？

Sun Flower . part 19 (後書き)

次回もよろしくです！

本当のことを言ってしまうおうか・・・
すうつと息を吸った。

ガラッ

その途端に博士が入ってきた。

「おっ、博士じゃねーか！」

「お、おお・・・」

「・・・なんか老けたな。」

「ほ、ほっとけ！」

博士の登場に、私は冷静に考えてみた。

今、彼に全て話して何になるんだろう。

どうにでもならないことくらい、わかってるはずなのに。

「そっさいや、哀！」

「え？」

「あ、あい・・・？」

「彼、私のことをそう呼ぶようになったのよ。」

「俺・・・記憶がある前はお前のことなんて言ってたんだ？」

「・・・は、はい・・・」

彼に、言ったらもう”哀”と呼んではくれないのかしら。

少し、うれしかったこの感情はもう、返ってこないのかしら。

「灰原。」

「へえ。」

蘭と園子はしたの名前で言ってるのに
なんでお前だけは苗字なんだろうな。」

「さあ?」

それは・・・私はしばらく後に貴方と出会ったからよ。

「それで?」

俺はどれくらい記憶をなくしてるんだ?」

「・・・っ」

『彼に言っただけなんになる?』

『でも、言ったほうがいいかもしれない。』

『言ったら、彼はまた彼女の元に戻ってしまうかもよ?』

『だからと言って、嘘をつくわけにはいけない。』

『通り魔の時点で嘘をついたことになるんだから、
今更積み重ねても、問題はないでしょ?』

私の中で意見が分かれる。

「哀くん？」

「・・・なんでもないわ。

貴方は・・・貴方はね・・・」

言ったほうがいい？

どうしたらいい？

『江戸川コナンのこと、言ったら彼女への重いが更に高まるかもよ？』

最後のこの一言が・・・

私の中のこの一言が・・・

私の決心を固めた。

「貴方はね・・・」

約一ヶ月程度の記憶を忘れてるのよ。

私は、その中旬に転校してきたから。」

「へえ。」

「私への呼び名が灰原なのは、ただ単に後から仲良くなった。ってだけ。」

「そっか。」

一ヶ月なら問題ねえな。」

「あ、哀くん・・・あれでいいのか？」

「ええ、いいのよ。」

彼には通り魔に刺された衝撃で一時的に記憶をなくしてると言ってるしね。」

私は生まれたときから黒の心を持っていた。

真っ黒な闇がいつも私を包んだ。

黒は、何を混ぜても黒にしかならない。

白に戻ることができないなら・・・

とことん黒に染めてやろうと・・・

私の中の悪魔が囁いていた。

Sun Flower . part 20 (後書き)

次回もよろしくです

Sun Flower · part 21 (前書き)

哀ちゃん視点終了です！

「あ、哀ちゃん！」

「コナン君が記憶喪失だって本当!？」

なぜ、蘭が知ってるんだろつと驚いた表情で顔を見る。

「博士ね・・・」

途端に呆れた表情と声。

「それで、目を覚ましたってことでしょ？
今から会えないかな？」

「無理ね。」

「え？」

「彼は記憶を失ってる。」

私と博士以外の人物は皆忘れ去ってるのよ。」

「じゃあ、私も・・・？」

「ええ。」

しらっとした表情で蘭を見上げる。

「医者が言うには、大事な部分しか覚えてないみたい。」

「大事な部分・・・？」

「ええ。」

彼が余分と判断した部分は全て忘れてるらしいわ。」

かすかに蘭の肩が揺れたのを哀は見逃さなかった。

そして、一発で見抜く。

(彼女は間違いなく、工藤君の正体に勘付いている・・・。)

「そっつか、コナン君にとって哀ちゃんは大事な人だもんね。」

「え……?」

「2人、いつつもコソコソ話して……
なんか親密そうな雰囲気だしね。しょうがないよね。」

「……そうね。」

「ねえ、一目見るだけでも駄目?」

「彼を混乱させるだけよ。」

「……そっか。」

「じゃあ、この花束。渡してくれる?」

「わかったわ。」

キレイな花束を受け取る。

「あつ、哀！」

何しに行つてたんだよ。」

「ちよつと呼ばれただけ。

それより、体調は大丈夫なの？」

「平気！」

なるべく早く退院して、皆に会いたいしよ！」

「・・・退院しても、しばらく家で安静にしてなきゃいけないのよ。」

「はあ！？

なんだよ、それ！！」

「なんだって言われてもしょうがないのよ。」

ふて腐れたように息をはく。

「クスッ」

「んだよ・・・」

「いいえ。」

「意外と子供だったんだな、って思ったただけよ。」

（彼が小1の頃は、本当に子供だったのね・・・）

「うるせーな・・・」

S u n F l o w e r ・ p a r t 2 1 (後 書 き)

なあ……この後どうなるか……!?!?

「私、貴方と居ると浄化された気分には浸られたわ。」

「は？」

「黒い私だけど・・・」

本気で白に戻れるって思ってた。」

「な、何いってんだ？」

「ねえ、蘭さんが好き？」

哀が言葉を発すると、一気に顔を赤くする。

コナン・・・いや、新一。

「なっ、イキナリなんだよ！」

「いきなりじゃないわよ。」

「ただ、気になっただけ。ねえ、どうなの？」

「す、好きなんかじゃ・・・」

「そっやっていつも、隠してたの？」

「隠すってなあ！」

「大体、あいつとはただの幼馴染で・・・」

お決まりの言葉がかえってくることを、哀は知っている。

「じゃあ・・・」

「？」

「私は好き？」

「え!？」

「彼女を幼馴染だと思ってるなら、私はなんだと思ってるわけ？」

「なんで、そんなこと聞くんだよ。」

「別に。」

「ただ聞きたくなっただけよ。」

「だんだん赤みが消えていくことに少し、胸が痛む。」

「哀は、良い奴だと思う。」

「それだけ？」

「力になってくれるし……」

「……」

「俺、哀は好きだ。」

”好き”という単語に素直に喜んでもいいのに

喜べない自分がいる。

哀は静かに声をだした。

「だけど……蘭さんとは違う。……でしょ？」

「あぁ。」

(彼は、わかってるのかしら。

自分の一言が、私の着々と黒に染めていることを・・・)

Sun Flower · part 22 (後書き)

次回もよろしくです！

「ねえ、哀ちゃん。」

これ・・・コナン君がすぎだったものなの。
渡してくれる？」

「・・・病院食以外のもの食べたら病院側に失礼だとは思わないの？」

「あ、そ・・・そうだね。」

「ごめん。全然気が利かなくて。」

「別に・・・」

「ねえ、哀ちゃん。怒ってる？」

「え？」

「怒ってるように見えたから。」

「余計なお世話よ。」

シンとしてそっぽを向いた。

「う、うめんね・・・」

「な」

「ね。」

「私に、工藤君を渡してくれない？」

「え？」

（ほらね・・・彼女は どうして 私が 工藤君を知ってるのか
聞かない。

やっぱり、彼の正体を、見抜いているのね。）

「どうして、私に聞くの？」

「だって、彼に告白されたんでしょう？」

「そ、そうだけど・・・」

「哀ちゃんと新一は年が違いすぎるじゃない？」

「じゃあ・・・江戸川君ならいいわけ？」

唐突な言葉に蘭はあいた口がふさがらない。

という状態。

「江戸川君なら・・・私はもらっていいの？」

「どうして・・・」

「どうして私が彼の正体を知ってるかっていうのは
どうでもいいのよ。」

「哀ちゃん・・・」

「ねえ、貴方はいつから気づいてたの？」

「少なくとも、最近までは気づいていなかったはずよ。」

（今更彼の正体をバラすことなんて、ためらいはなかった。
彼女に危害が加わるなんて、どうでもよかった。）

「そうだね・・・」

「たまたま病室の前に来たとき、博士が新一って言ったのが聞こえたから。」

「そのときは慌てて走っちゃったけど。」

「・・・」

「でもね、哀ちゃん。」

私・・・哀ちゃんの恋は応援してるよ。
新一は渡せないけどね。」

Sun Flower · part 23 (後書き)

感想お待ちしています

「・・・そうね、私もこの気持ちを簡単にはがすことも忘れ去ることもできないわ。」

「でしょ?」

「でも、今彼の一番近くにいるのは私よ。」

「そうだね・・・。」

「これから、彼が私を見てくれるよう努力するつもりよ。だからお願い。」

私の邪魔をしないで。」

「・・・私の好きな人が他の人を好きになっちゃうかもしれないのに、」

黙ってなんかいられないよ。」

正論を吐く蘭に哀はため息をついて、もらした。

「彼、記憶喪失だって言ったでしょ？」

「うん。」

「彼は工藤新一の小1の記憶しかないのよ。」

「え!？」

「それからの記憶がすっぱり抜けてるの。」

「勿論・・・高校生になったことも、江戸川コナンになったことも・

・
貴方に告白したことも。」

蘭の心に、ずっしりと哀の言葉がのしかかる。

「工藤君は私を貴方の友達だと勘違いしてるわ。」

「灰原じゃなくて、哀と呼んでくれるの。」

「でも哀ちゃん・・・」

「哀ちゃんと博士の記憶しかないって言ってたよね？」

「あれは、嘘？」

「ええ・・・」

そうしたら、諦めてくれると思って。」

「……」

自分らしくない言動だと、哀は自分自身わかっていた。

わかっていながらも、”恋”というのはこんなにも人格を変えてしまふのか。

と冷静に考えてしまふ。

「私、小さい頃から何のために自分がここに存在するのかわからなかった。

両親も居なかったし、唯一の助け舟である姉は殺されて・・・自分の生きる道を失った、幸せなんて感じたこともなかった。でも！今はものすごく幸せなの。」

「哀ちゃん……」

「この幸せを、壊したくない。

だから、貴方が邪魔なの・・・

貴方なら、ほっとけばいろんな男が寄ってくるでしょ？

貴方を大事にしてくれる人はたくさんいるでしょう？

貴方は誰にでも愛されるでしょ？」

知らぬうちに、涙が溢れてくる。

「私には、私には彼しかいないの！

工藤君しか助け舟がないの。

工藤君しか私を全て受け止めてくれる人はいないの！」

全て言い切ると「はぁ、はぁ。」と呼吸する。

「哀！」

「こ、コナン君……」

「工藤君！」

新一は小さな体で2人の元へ行く。

「哀？何泣いてんだ？」

「別に・・・何でもないわ。」

「？・・・あれ、蘭に似てる・・・。」

「し、新一・・・ホントに記憶を・・・。」

「何で俺の名前知ってたよ。」

蘭には姉さんなんていねえし・・・いところで蘭に似てるやつなんて聞いたことない・・・

「すんげー似てる。」

「さ、工藤君。」

お姉さんはもう帰るところなの。

引き止めたら悪いわ。

私たちは病室に戻りましょう。」

「あ、ああ・・・。」

そう言って歩き出す二人に蘭は呼び止める。

「哀ちゃん!」

「……ひとまず、帰ってちょうだい。」

冷たく、哀は言い放った。

Sun Flower · part 24 (後書き)

これからの展開・・・
予想できませんね。

なにしろ、私もですから。
(おいおい・・・)。

「なあ、哀。」

「あの人誰だよ。」

「別に。」

「ただの知り合いよ。」

「なんだか蘭に似てたよな。」

「そう？」

「私はそうは思わないわ。」

「・・・なんか、怒ってるよな。」

「怒ってないわ。」

「そうか？」

怒ってない。

ただ・・・こんなときも蘭を忘れていないことに

傷ついただけ。

いつだってクールな哀も

ただの女の子。

傷つくこともあれば、泣くことも、怒ることもある。

恋するじいちゃん。

「あー、早くみんなにあいてーなあ。」

「……しばらく我慢しなさい。」

「わあってるってー!」

「ならいいけど。」

「あ、そうだ。」

「今度ここに来るとき推理小説もって来てくれよ。」

「ええ。わかったわ。」

「……父さんと母さん……なんか言ってたか？」

「え？」

「いや、いくら忙しくても息子が入院してるのに一度もこねえにもどうかと思うだろ？」

（貴方の両親が来ないのは、伝えてないからよ。）

工藤君・・・)

「そうね、会いたって言ってたわ。
でも、私と博士が止めたのよ。」

「なんで？」

「今は安静第一。」

「あちらも忙しいから、私たちが看病することにしたの。」

「ふーん。」

「・・・寂しいの？」

「なっなわけなねーだろ！！」

「寂しいのね。」

「だから、ちげーって！！」

「はいはい。」

「っ！オメーのそういう言い方、ムカつく。」

「記憶があるときも、貴方にそう言われたわ。」

「んだよ、もうちょっと可愛くしてりゃあいいのによー。」

「それも、言われたわ。」

まあ、私には褒め言葉にしか聞こえないけどね?」

この時は・・・

今までの灰原哀に戻れた。

やっぱり、

自分には彼が必要だと、哀は思った。

S u n F l o w e r . p a r t 2 5 (後書き)

どうなるんでしょうか!?!?

「私、蘭さんになりたいわ。」

ぼそっと漏らした言葉だった。

「はあ？」

だったら、空手でも始めたらいいんじゃないか？

「・・・そうじゃなくて・・・」

「じゃあ、料理でも習えば・・・」

「だから、違っちゃって言うてるでしょ？」

「だったら、何だって言うんだよ。」

ちよつと、イラついたような表情で

哀を見る。

「私は、毛利蘭って言う人になりたいの。」

素直に口に出してみる。

彼の反応はどんな風だろうか。

と少し期待した目で見る。

「それは無理だろ。」

帰ってきたのは

デリカシーも心配りのかけらもない

一言。

「んなのこと、最初からわかってるわよ！」

「うわっ」

イキナリ投げてくんじゃねえよ！クッションを。」

「ごめんなさい？」

デリカシーのない探偵さん。」

「あのなあ……」

段々言葉が投げやりになってくる。

「はいはい。」

蘭さん大好きさんには何言っても通じないことくらい
わかってるわよ。」

自分で言っただけで心が痛くなるのを

感じた哀だった。

Sun Flower・part26(後書き)

少しでも、早く元の哀ちゃんに

戻したいんですよね。

Sun Flower · part 27 (前書き)

赤ちゃん語りです。

私は、どうしたら彼の一番になれるのだろう。

こんなこと、考えたことなかった。

誰かにとって、自分が特別な存在でありたい。

なんて、現抜かすようなこと、思ったこともなかった。

” 私を好きになっ
てほしい。
私だけを見て
いてほしい。
”

恋に溺れてしまったのかしら？

私は、工藤君に「工藤新一」になってほしかったわけじゃない。

「江戸川コナン」になってほしかったの。

全て、全て……リセットしてほしかった。

そして、私もリセットしたかった。

最悪な形であつたりしないで・・・

お互い、ただの小学1年生として、純粹に恋をしたかった。

私の恋は”黒い”

「江戸川君……」

「はぁ？誰だ、それ。」

私、本当に・・・まだ黒い血が流れてたみたい。

自覚してたけど、これほどまでとはね。

彼に、全て本当のことを話そうかと迷ったとき、

私は否定した。

その時はまだ、良心があったんだと思う。

「なあ、このときホームズの話したんだけど、
そしたら蘭のやつ、起こってよ……」

「このジューズ！
5歳のとき、蘭がこぼしたやつなんだけど……」

「なあ、哀。

蘭……泣いてるか？
あいつ、本当に辛いとき泣かねえんだよ。」

彼から出てくる言葉は、
” 蘭 ”

一度も、私の名前は出てきたりしない。

彼に、悪気がないことくらい
．．．

知ってるけど。

やっぱり、堪えるわね。

Sun Flower · part 27 (後書き)

さあ。次回はどうなるのでしょうか!?

Sun Flower . part 28 (前書き)

赤ちゃんの心・・・

彼から”蘭”という単語が出てくるたび・・・

私の心が深く傷つくのがわかる。

~~~~~

私は彼の一番になれないのだろう。

~~~~~

彼女より上にいけないのだろう。

育ちが違うから？

私は、黒だから？

彼女は天使だから？

私は、可愛くないから？

ハーフだから？

それでも彼は・・・私を守ってくれると言ってくれた。

少なくとも・・・江戸川コナンとして・・・

彼は、私を守ってくれるといった。

私は、貴方に心を取られてばかり。

なのに、どうして貴方の心を私に出来ないの？

” 彼に本当のこと、言っちゃえば？ ”

”だめよ！！そんなことしたら・・・”

”私と恋人同士だったのよ。

蘭には、新しい恋人ができてるのよ
って、嘘ついちゃってもいいんじゃない？”

”ちょっと待ってよ！

貴方はそこまでして、彼の心がほしいの？
本当に黒に染まっちゃうわよ？”

”もともと黒なんだから、今更黒になってもどうつてことないわよ。

”

”だからったねえ・・・”

まだ良心のある私と

完全に黒に染まった私の

口論が頭の中で繰り広げられる。

” 現に、昨日話そうとしてたじゃない！
本当のことを”

” あれは！一時的な迷いよ！
本心なんかじゃないわ。”

そう、あの時点では・・・本心なんかじゃない。

今だって、心の中では『まだ良心のある私』に味方をしている。

だけど、『完全に黒に染まった私』が言った次の言葉は・・・

私の決心を固める。

『完全に黒に染まった私』が私の決心を固めるのはもう・・・

2回目だった。

” 悩みたいなら悩んでてもいいけど・・・

悩んでいる間に、彼女の元に好意が強まったらどうするの？
彼はまだ、小1の記憶しかないの。

彼女に告白したことも記憶から除外されてるのよ？

こんなチャンス・・・ないんじゃない？”

Sun Flower . part 28 (後書き)

次回もよろしくです!!

「ねえ、工藤君。」

「ん？」

「私、貴方に嘘をついていたの。」

驚いたように目を見開く。

哀は、不適な笑みをうかべる。

「ごめんなさいね・・・貴方を傷つけまいとしたことだったけど・・・」

・
やっぱり、本当のことは言った方がいいと思って。」

「なんだよ、本当のことって。」

「貴方はね、工藤新一じゃなく、江戸川コナンなのよ。」

「は？」

何を言ってるんだと

バカじゃねえかと

新一は哀を見る。

「嘘じゃないわ。」

貴方はね、覚えている記憶から、高校2年生までの記憶がすっぽりと抜けてしまってるのよ。」

「ち、ちよつと待てよ！」

高校2年生って、俺のこの小さな体は……」

「だから、言ったでしよう？」

貴方は、江戸川コナンとして生まれ変わったのよ。」

「は、話しがみえねえんだけど……」

「全て話しましょうか？」

新一は恐る恐る首を縦に振った。

Sun Flower · part 29 (後書き)

すみません

勿体ぶりますww

「貴方はね、高校生探偵として活躍してるのよ。」

「俺が？」

「ええ。」

でも、ある日を境に貴方は身を隠さなくなっちゃった。」

「隠すって……」

「蘭さんの空手の都大会優勝祝いにトロピカルランドへと遊びに行ったのよ。」

貴方たち2人はね。

そこで、怪しい取引現場を目撃した。

高校生探偵としての貴方は、好奇心で近づいたのね、彼らに……

「

哀はゆっくりと病室を往復しながら話す。

「しかし、それが仇となってしまった・・・」

ゴクッ

新一の喉がなる

「見つかったのよ。取引現場をしている仲間からね・・・」

「それで・・・俺は・・・」

「殴られて、ある薬を飲まされたわ。

名称は・・・APT X 4868。毒薬よ。」

「ど、毒薬!？」

「ええ・・・でも、運が良いことに貴方は死なずに幼児化した・・・」

ちなみに、その薬は私が作ったの。

私もね、貴方と同じように薬を飲んで幼児化したのよ・・・」

「・・・」

「ハッキリ言ってしまうえば、私は・・・殺人組織の一員だった。ってわけ。」

その組織を貴方はつぶすため、名前を変えて過ごしてたのよ。貴方が記憶を無くす前も江戸川コナンとして、温泉旅行に行ってたところなのよ。」

「じゃあ・・・あの、蘭に似た人は・・・」

「そうよ。」

正真正銘、貴方の幼馴染。毛利蘭。」

「俺のこと、コナン君って言ってたよな・・・」

「貴方はね、招待を偽ってたの。」

「蘭にも？」

「ええ。」

「何で？」

「そうね・・・彼女は貴方にとってそういう存在だったからじゃない？」

「そんなことねえ！」

俺は・・・俺は・・・俺にとってあいつは・・・」

「だったら、なぜ言わなかったのかしらね？」

彼女に・・・自分の正体を。」

まあ、外に漏れてしまえば、彼らに見つかり。
すぐに殺されてしまう心配もあったし・・・
貴方は彼女のこと信賴してなかったんじゃない？」

「蘭は、口が柔らかい女じゃねえよ・・・」

「貴方がなんと言おうと、言わなかったことは事実。」

新一は口を閉ざす。

「つまり・・・私たち2人は同じ穴のムジナだった、ってわけ。」

「俺は・・・殺人犯のお前とは・・・」

「ちゃんと受け止めてくれたわよ？」

私を、彼らから守ってくれと言ってくれたくらいね。」

これは事実。

「まあ、どう受け止めるかどうか貴方次第だけど・・・
今話したことは全て事実。」

ちなみに、貴方と私の正体を知ってるのは

博士、西の高校生探偵、貴方の両親、私の死んでしまった姉」

次々と名前を出していく。

「貴方が聞いたことのない名前だと思った人物は

小1以後に出会った人物だから、気にしないで？」

それと・・・一時だったとはいえ、貴方に嘘をついてたこと

謝るわ。ごめんなさい・・・。

それじゃ、また明日来るから。」

SUNFLOWER・part30(後書き)

あ~~~~~

あ~~~~~ 全て話してしまっただけ！

コンコン

ガラッ

「よく眠れた？」

「哀か・・・」

「私で残念でした。」

「そういう意味じゃねーよ。」

「そう？」

哀は持ってきた果物をむき始める。

「なあ……俺さ、江戸川コナンとしてどんな風だった？」

「別に。」

「普通の子供だったわよ。」

「ふーん……」

「そんなに蘭さんに会いたい？」

「そんなんじゃないよ。」

「あら、照れないのね。」

「あのなあ、こっちはかなり衝撃的なこと聞かされてんだぞ？
照れたりなんかする余裕もねえよ……」

「……やっぱり、話さないほうが良かったのかしら？」

「いや、話してくれたほうが助かったよ。」

「そう。」

彼を混乱させたりしていることに心が痛んだが

内心、喜んでいる自分がいることに

恐ろしさを感じた。

全てを吐ききった後、『まだ良心がある私』が戻ってきた。

ひどく罪悪感につつまれて・・・

つらかった。

ガ
コ
ン
ツ

自動販売機の前で哀は呆然と立っていた。

押したコーヒーをゆっくりと取る。

そしてまた、ゆっくりと椅子に座った。

「・・・ほんと、私ってバカよね。」

「・・・哀、ちゃん？」

後ろを振り返るとそこには蘭がいた。

「蘭さん・・・」

「何かあった？」

蘭はゆっくりと歩み寄って哀の隣に座った。

「・・・私、あなたに酷いこと言ったのよ？」

「うん。」

「傷つけたわ・・・」

「うん。」

「なのに、なんで笑えるの？」

「・・・哀ちゃんは、私の友達だから。」

「え？」

「私にとって、哀ちゃんは・・・かけがえない友達よ。」

この人は、何を言ってるんだろう。

哀にとって、蘭の言葉は衝撃すぎて異国の言葉にしか聞こえない。

273

「自分が恐ろしくなるくらい、新一が好きなんだよね。
すごく・・・情熱的じゃない。」

そんな子を嫌いになるほど、私は冷たい人間じゃないよ。」

「・・・蘭、さん・・・」

「ね?」

「・・・私は黒い人間よ。白のあなたが・・・
天使のようなあなたが、悪魔な私を・・・?」

「哀ちゃん!」

急に大声を出す蘭に、一瞬ビクリと肩を動かす。

「哀ちゃんは、悪魔なんかじゃない！
私も・・・天使なんかじゃないよ。」

「・・・あなたは、天使よ。」

「ううん。」

私だってね、コナン君となった新一が哀ちゃんに信頼していると見ると・・・

すごく嫉妬しちゃうもん。

私だって、黒いところくらいあるんだから。」

「私に、工藤君が信頼してる？」

「してるわよ。」

だって、新一・・・哀ちゃんの傍にいますでしょ？」

「え？」

「新一ね、心を開かないとあんな無邪気に笑ったりしないの。いつも・・・心に壁つくって・・・
だから、哀ちゃんは新一に信頼されてる。」

「私が・・・」

心の中の、糸が切れたような感じがした。

Sun Flower · part 31 (後書き)

そろそろ終わりかなー・・・

あんまり、バトルって感じがしませんでしたね。
すみません。

蘭と哀ちゃんのバトルは

あんまり過激で熱いものじゃないと思って・・・
冷やかに、静かなバトルなんじゃないかなって
で、最後はしつとりと終わるだろうな・・・

って勝手に解釈してしまってます・・・^^；

「蘭さん。」

「何？」

「私ね、工藤君に本当のことを話したのよ。」

「え？」

「あなたは、高校二年生までの記憶がないんだって。黒の組織のことも……」

「……黒の組織って何のこと？」

そう、蘭は新一の正体がわかっただけで

成り行きまでは話していない。

「工藤君は、貴方と別れたあの日。
毒薬を飲まされて体が縮んだのよ。」

「え？・・・え？」

「A P T X 4 8 6 9。」

殺人組織の科学者作った神秘的な毒薬。
まだ未完成だったから、工藤君は幼児化だけですんだ。
その科学者って言うのが、私。」

大きく目を見開く。

「哀ちゃん、貴方も？」

「ええ。私も幼児化したわ。

本名は宮野志保。お姉ちゃんが殺されたことがきっかけで私は
組織の裏切り者となった……」

「哀ちゃん、ほかに身内は？」

「いないわ……両親も組織の一員だったけれど事故で……」

目を伏せた哀にそっと優しい温かみが包み込んだ。

「私は、抱きしめることしかできないけど……」

「蘭さん？」

「そっか・・・そうだったんだ・・・」

「哀ちゃんが一番つらかったね。やっぱり・・・」

「私、何にもわかってなかった。」

「でもね、哀ちゃん・・・」

「貴方が組織の一員となっていたのは仕方の無いことだったのよ。」

「だって、両親が一員だったんでしょ？」

「子供がならないなんて、おかしいじゃない。」

「だけど・・・」

「哀ちゃんが悪いんじゃない。」

「でも、私は毒薬を作ったわ。」

「作ってるなんて思わなかったけど・・・」

「あの組織の一員であること、お姉ちゃんが殺されるまで
罪悪感なんてなかった・・・！」

「それは・・・それはね、哀ちゃん。」

「洗脳だよ。」

「洗脳？」

「そう、洗脳。」

「きっと・・・殺人組織だから薄暗い窓もないような基地だったんじゃない？」

「そんなところに、閉じ込められた状態だったんでしょ？」

「ええ・・・。」

「それに、子供ときからその状態だったのなら・・・

「何も感じなくて当然だよ。」

「洗脳されてたの、これが当たり前だった。」

「でも、お姉さんが殺されてから、哀ちゃんの洗脳が解かれた・・・」

「解かれた？」

「そうだよ・・・」

「だって、哀ちゃんだって殺すのはおかしい、って思ったはず。」

お姉ちゃんだったから余計だったかもしれないけど・・・
理由もなく殺すなんておかしい、って思ったよね？」

確かに、そうだった。

姉が殺されて、なんで殺されたのか理由を何度も問い詰めた。

たった一人の肉親。

なぜ、理由も話してくれないのだろうか・・・

「哀ちゃんは黒に染まったとか・・・前言ってたね。」

「・・・」

「哀ちゃんは黒に染まってなんかいないよ。」

「え？」

「お姉ちゃんの死を、哀ちゃんは泣いたと思う。
たとえ肉親でも・・・人のために泣ける人はすごいよ。」

「それを言うなら、貴方だって・・・」

「私は、くだらないことでもすぐ泣いちゃうから・・・。」

涙があふれる。

涙だけがひたすら、あふれる。

「哀ちゃんが本当に黒に染まっていたら・・・」

歩美ちゃんたちとあんなふうに笑ったりしてないよ。

もっと、自分に自身をもって。

哀ちゃんは悪魔なんかじゃない。

歩美ちゃんたちも、私たちも、みんな・・・

哀ちゃんが居てよかつたって思ってるよ。

それだけで、哀ちゃんは十分天使なんだから。」

「蘭さん・・・」

「私は、哀ちゃんが大好き。」

「ら・・・さん・・・」

「ね？」

哀は無言でうなづいた。

S u n F l o w e r . p a r t 3 2 (後 書 き)

そろそろですかねえ・・・

最終回。

どうなるんだよ・・・。

ガラッ

「工藤君・・・」

「どこに行つてたつて・・・」

「どうしたんだよ、その目!」

「別に。気にしないで。」

腫れた目を隠すように

話しをそらした。

「それよりね、貴方に会わせたい人がいるのよ。」

「会わせたい人？」

「ええ。」

「・・・入って、くれる？」

ガラッ

「……蘭？」

「そうよ。」

「正真正銘、貴方の幼馴染……毛利蘭さん。」

「まだ記憶がないんだ。新一……」

「ええ。」

「……やっぱり俺、高校2年生なっただんだな。」

「そうよ。」

「キザでカッコつけな、高校生探偵なんだから。」

「平成のホームズって言われちゃって……」

「新一は、憧れのホームズに近づいてるよ。」

「俺が？」

「うん。」

「まあ、私から見れば……大バカ推理之介だけどね？」

「お、大バカ……？」

ひくつと

頬がつる。

「今にも増してホームズ好きが深まっちゃったのよ。
推理オタクにもほどがあるわ……。」

「お前なあ……。」

「でも、ほんと小さい姿で蘭って言われると
小さいころに戻ったみたいだね。」

蘭がにこつと笑うと

新一はフツと笑みを消した。

「新一？」

「……俺、お前に正体隠してたんだよ……
なんて言わなかったんだろうな。」

「それは……!」

「？」

「それは・・・それは・・・」

「蘭さんに危険があったからよ。」

「危険？」

「そう。」

もし、工藤君の正体が組織にバレたら

周りの人にも危害が加わる。

だから、貴方は一番・・・一番大切な彼女には言わなかったの。」

哀の言葉に新一は顔を赤くさせて

「一番大切って・・・」

別に、んなじゃねえよ・・・。」

と反論する。

「クスッ

ほーんと、おっかしい。

そうやって拗ねたような言い方。

新一らしいよねえ。」

「お前だつて似たようなもんじゃねえか。」

「・・・もう蘭さんは反応しなくなったのよ。」

「え？」

次の言葉は

新一にとって、衝撃的なものだった。

「貴方から告白されたんだから。」

Sun Flower . part33 (後書き)

っぴっぴっ

次回もよろしくです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0689y/>

冬の向日葵

2012年1月6日12時51分発行